# Sun 彩

Summer 2021

茨城県
東茨城郡
茨城町

まちと
つながり

霖去り　大暑　雷鳴と共に訪る

陽　燦然と輝き　営み　眩しく勢う

湖光　地を覆う万緑　幾重の紆濤となり

夕凪の儚さと共に　夏の季を彩る

Sunは　茨城町と　ゆるやかにつながる　いくつもの縁を

人々の暮らし　情景と共に　綴り伝えていきます

撮影場所:中石崎地区

Contents　目次


03 特集一 ある洋画家と郷里の縁
町の絵を探して

09 軌跡
信が居た景色 続く縁

11 まちで暮らす人 まちを想う人

17 連載　マチのケシキ

18 編集室から



Sun 13
茨城県 東茨城郡 茨城町
Summer 2021

Cover
"深く 青々とした湖面"
油彩を使い涸沼の青々とした水面を表現。
栗原信が見ていた風景は広々としていますが
街の風景を違った視点で切り抜く様は
画家や芸術家としてとても大切だと思うのです。

※取材に際し、一部マスクを外しての撮影をお願いしておりますが
新型コロナウイルス対策を十分に講じたうえで、取材に臨んでおります

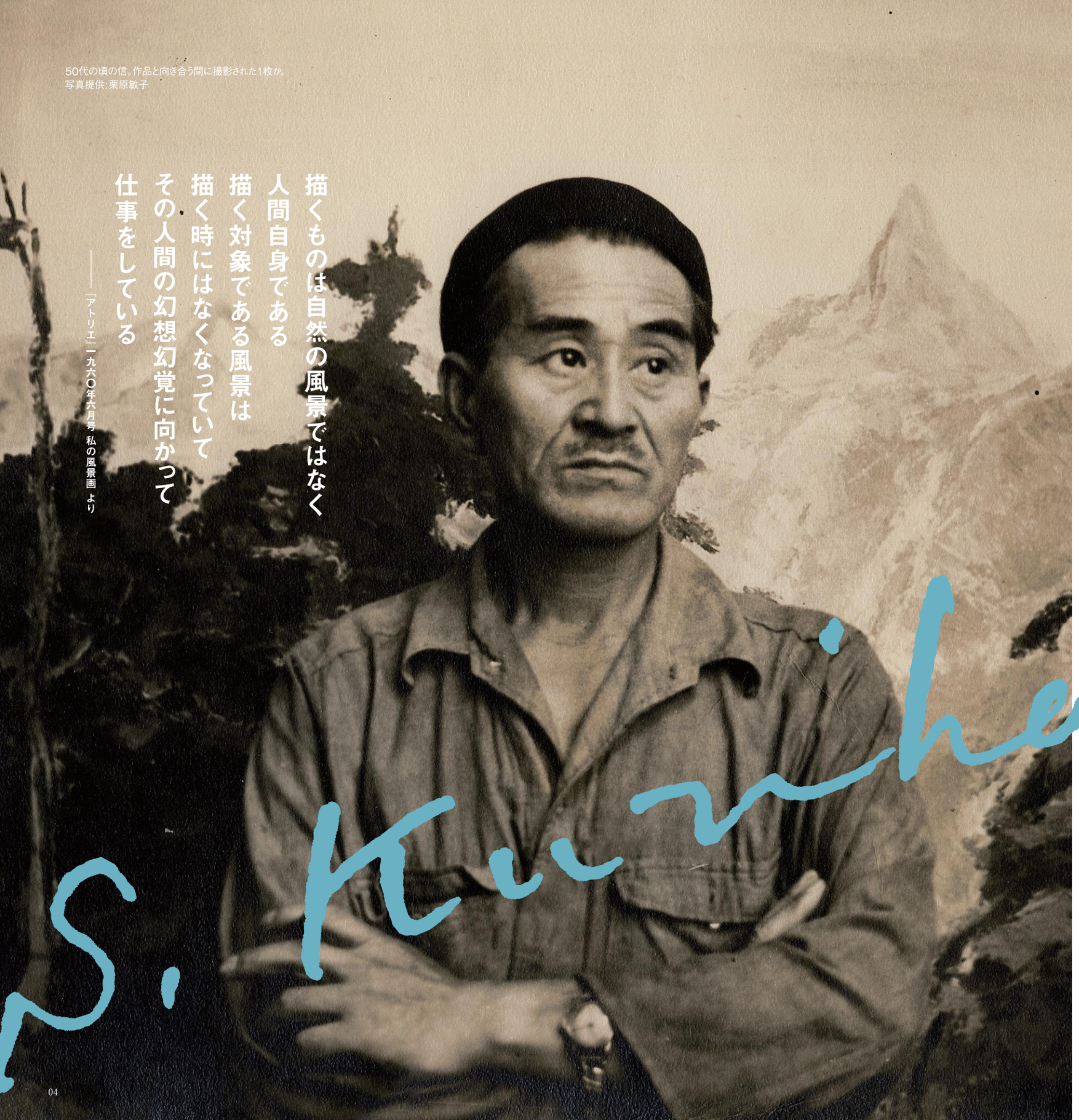
あなたは、栗原信を知っていますか。
彼の描く油絵は、華やかというよりも、モチーフを単純に削ぎ落とし、どっしりとした構図と落ち着いた色使いで、いぶし銀のような渋い魅力を放っています。どことなく彼の故郷を思わせるような素朴さと色合いを感じるのは私だけでしょうか。茨城町出身の洋画家・栗原信はヨーロッパに始まり、時には従軍画家として戦地の最前線にも赴き、台湾、旧満州、中近東、インド、アフリカなど、世界を旅しては、画業を磨き続ける生涯を送りました。彼が描いたのは旅先の自然や町並みといった風景。「その人間の幻想幻覚に向かって仕事をしている」と語っているように、彼は描こうとする風景の中に、その時感じた心象を投影しながら一つひとつの作品を生み出していたのでしょう。異郷を飛び回る彼でしたが、時折故郷へ帰ってきては、教え子や友人たちとの親交を温めていました。しかし、不思議と町内を描いた作品が見当たりません。彼が亡くなって半世紀以上経った今、栗原信が描いた「町の絵」を探して、彼が残した縁を辿ります。

# ある洋画家と郷里の縁

特集

## ――町の絵を探して

構成｜石川聖太
文｜二川ナオミ
写真｜竹内慎




50代の頃の信。作品と向き合う間に撮影された1枚か。
写真提供：栗原敏子

描くものは自然の風景ではなく
人間自身である
描く対象である風景は
描く時にはなくなっていて
その人間の幻想幻覚に向かって
仕事をしている

――「アトリエ」一九六〇年六月号 私の風景画 より

# 私の作品は、風景画といふよりもある意味では旅人の旅情を込めた記録であることです。また、年齢と共に表情も変わつて來るのだと思うのです。

――二紀会発行『栗原信 画集』より

栗原信こと栗原信賢は一八九四年（明治二七年）に東茨城郡石崎村上石崎（現茨城町上石崎）の農家の次男として生まれました。小学校卒業が最終学歴として一般的であった当時としては恵まれたことに、現在の茨城大学教育学部の前身である茨城師範学校へ進学しました。家のことに関心の薄い父に代わり母・いのが懸命に働き、信の進学を支えていたのだそうです。信もまた、多くの学生が寄宿生活を送る中、実家から毎日歩いて学校へ通っていました。彼はのちに、この時鍛えた脚力が従軍画家時代の過酷な戦場生活に役立った、と語っています。

師範学校卒業後、大戸尋常小学校（現茨城町立大戸小学校）へ赴任。教壇に立つ傍ら、絵の講習会をするなど制作活動を始めていたとみられます。同僚であった西山やへと結婚し一九一六年に上京。東京蒲田小学校で教員を続けながら、二科展（*1）に出品した作品「木」が初入選しました。翌年も「竹藪」「夕暮」が入選しましたが、翌々年に落選。しばらく公募展から離れ、小説家・井伏鱒二らと同人雑誌の創刊など、文学活動に力を入れます。

関東大震災以降、再び画壇に舞い戻った彼は一九二六年に二科展入選、翌年の太平洋画会受賞を経て、フランス遊学へと旅立ちました。

## フランスへ遊学

一九二八年から三年間、時々工場で働き生活費を工面しつつ、日本に残した妻からの仕送りなど献身的な支えを受けながら、フランス・パリにあるグランド・ショミエール（*2）に在籍し、独自の画風を確立していきます。一九四九年六月発行の『美術手帖』誌の中で、「パリ滞在の最初の一年は全く模倣狂で、一通りは現代大家の模倣はやって見た、恥ずかしい日月を送ったのであった」「青年の頃私は感激した作品に捉われて、すぐその技法の模倣をやってしまう癖があった。それを延々繰り返して徒らに様々な画風を追って渡り歩いたのであった」「私がナイフを使い出したのは、子供の時から小刀細工が好きであったのもその一因であるかもしれない」と語っています。ヨーロッパ滞在中に様々な西洋美術に触れて信が行き着いたのは、幼い頃から慣れ親しんだ小刀のようなペインティングナイフを使った質感を表す技法でした。

帰国後、遊学中に制作した作品を二科展に特別出品したところ昭和洋画奨励賞を受賞。それからというもの、長期間の旅をしながら制作を続け、東京の自宅へ帰ることも稀だったようです。一九三〇年代半ばになり、日本が戦争へと突入すると、信は戦地に赴き従軍画家としても活動していました。時には取材のために砲弾が飛び交い味方のうめき声が聞こえる前線へ赴くこともありました。

## 二紀会の創立

終戦を迎えた一九四五年、戦局悪化に伴い解散していた二科会が再結成するにあたり、「戦後新たに（二科会の）第二紀を作り上げる」という意図のもと、宮本三郎、田村孝之介などの洋画家仲間たちと共に二紀会の創立と運営に尽力しました。一九五〇年に新潟大学洋画科教授となってからも積極的に世界中を飛び回り、数々の作品を生み出しました。

一九六六年五月、長旅を終えて帰国。翌月に開いた自身の個展会場で倒れ、七二歳でこの世を去りました。

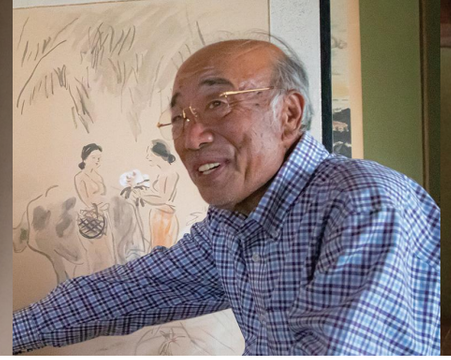
5ページ：茨城町立大戸小学校に飾られる「秋の銀閣寺」。 6ページ：上左から／町に寄贈されている「パリの街路樹」。／1914年（大正3年）3月の大戸小の卒業写真。詰襟服に学帽姿で写る信の姿が。下左から／絵は我が家の家宝、と語る栗原英一さん。／リスボンを描いた水彩画。屋外のスケッチはデッサンインクと水彩で行い、アトリエでそれを基に油絵を描いていた。

## 縁を巡る

町内のあらゆる場所に飾られる信の作品ですが、そのどれもが旅先の風景を描いた水彩画や油絵で、町を描いた作品はありません。手掛かりを求め、彼が師範学校卒業後に勤めていた大戸小学校へ足を運ぶと、校長室の壁に大きな油絵が飾られていました。聞くところによるとこの作品は信の没後、やへ夫人によって寄贈された「秋の銀閣寺」という作品でした。

さらなる手掛かりを求め、信の生家を訪ねることにしました。迎え入れてくださったのは信の兄・精の孫にあたる栗原英一さん。信の絵も数点ありましたが、どれも旅先を描いた作品のようです。「いつだったか、子どもの頃、近くの分校でね、おじさんが旅先で撮った写真のスライドをみんなに見せてくれたことがあったなあ」「そういえば昔、うちの姉と一緒に水戸のデパートまでおじさんの個展を見に行ったこともあったよ。姉は絵を鑑

*1：美術団体である「二科会」が主催する美術展覧会
*2：パリにある美術学校



賞したり、他の人と絵について話してたけど、私はさっぱりで(笑)。おじさんは『なんでも好きなものを食べていいよ』と言って、同じ階にあった少し高級そうな喫茶店のチケットをくれたんだよね。上に赤いサクランボがのったクリームソーダを頼んだのを覚えているよ(笑)」と信にまつわる思い出話を聞かせてくださいました。

## 西山家と清水家

取材の中で妻・やへの実家西山家の親戚で、信とも親交があった馬渡地区の清水長寿さんという方の存在が浮かび上がってきました。さらなる手掛かりを求め、馬渡地区の区長のもとを訪れてみることにしました。

区長の清水秀一さんは、大戸小学校六年生の時(一九五二年頃)に、当時の校長先生が「町出身の有名な画家に描いてもらいました」と言って、旧校舎の下を流れていた涸沼前川を描いた絵を全校集会でお披露目していたのを覚えているそうです。とても興味深い情報でしたが、残念ながら現在の大戸小学校にあるのは「秋の銀閣寺」一枚のみ。もしかすると、校舎建て替えの際に紛失してしまったのかもしれません。「その画家は一時大戸に住んでいたとも言っていたから気になって、家に帰って親父にそのことを聞いてみると『いた』って言うんだよね。当時、その画家の先生と親しくしていたのが清水長寿さんという人みたいだね」と教えてくださいました。

淡い期待を抱きつつ、長寿さんの家を訪ねてみると、現当主である清水慎一さんにお話を聞くことができました。

慎一さんは長寿さんのお孫さんで、絵について訊ねたところ、こちらにも風景が描かれたものだけ、ということでした。ただ、信が下宿していた建物は当時のまま残っているということでしたので見せていただくと、案内された先には、信が暮らした当時の雰囲気が漂う平屋の日本家屋が静かに佇んでいました。さらにお話を伺うと、長寿さんは長年西山家の墓を世話していたこともわかりました。

## 恩師と教え子が育んだ絆

彼を慕い、交友も深かった教え子のもとになら何かあるかもしれないと、上郷地区の奥津日出海(ひでみ)さんを訪ねました。

日出海さんの祖父・渉さんは信の教え子であり、信も帰郷のたびに渉さんのもとを訪れては親交を深めていました。家のあちこちに飾られた作品は渉さんが信から贈られたものだそうです。渉さんは絵や短歌が好きで、自分が詠んだ短歌に即興で挿絵を描いてもらったりしていたようです。

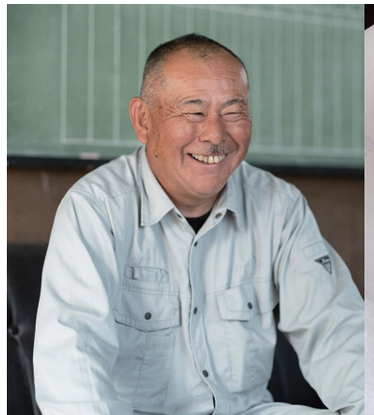
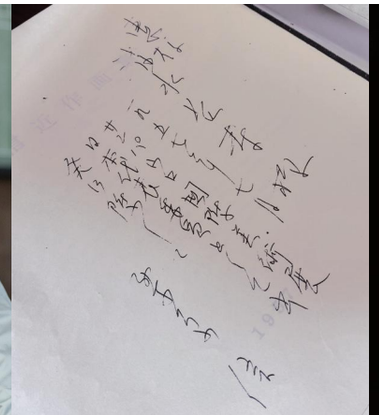
作品の中には二人の合作がちらほら見受けられます。中でも南方の国の人々をモチーフにした大きな屏風絵は見事な大作です。

日出海さんが祖母から聞いた話によると、信がその屏風絵を描く際に、墨汁をふくませた筆を屏風の上にうっかり落としてしまい、大きなシミを作ってしまったのですが、「大丈夫!大丈夫!」と言ってそのシミを上手く利用し、絵を仕上げたのだそうです。信が手を滑らせ付いたシミは手前に座る男性の背中のあたり。言われてみればなるほど、シミに見えてきました。信が渉さんのために描いた作品は生業として描くものとは異なり、どこか柔らかで親しげな印象を受けました。

後日、改めて日出海さんを訪ねると、新たに見つけた手紙と作品を見せてくださいました。水墨画のような優しく親しみあふれるタッチの作品には、嬉しそうに微笑む男性が描かれていました。

**アゲマス、ミッシラ勉強しナサイ**
**来年先生が此(この)学校におつたなら**
**油絵であなたの肖像を**
**描いて上るからね**

——教え子 奥津渉さんに宛てた手紙より

上段左から:鮮やかな赤い花が描かれた渉さん宛ての手紙。／在りし日の奥津渉さん。／信が描いた渉さんの肖像画。／信と渉さんの合作が部屋に掛かる。／奥津日出海さん。現在でも大戸小学校の子どもたちと農業体験などで関わる。／額装された山の絵。おそらく筑波山なんじゃないかな、と日出海さんは語る。 下段左から:清水慎一さん。信の思い出話をよく聞かされていたという。／信の作品集に書かれた清水長寿さんへの御礼文。／部屋に掛かる信の作品。／信が下宿していた日本家屋。

# 軌跡
## ―信が居た景色 続く縁

東京都杉並区浜田山に住む信の三男・程（てい）の妻・敏子さんは信に関する作品や膨大な資料を管理しています。

その中に茨城町を描いた作品があるか確認していただいたところ、見当たらなかったとのことでした。敏子さんは「無口で厳しかったが、義父は誠実で優しい人でした。倒れる数日前に『右手がだるいんだよ…』と言いながら、展示に向けて作品と向き合っていたのを覚えています。展示会の日、玄関で『行ってくる』と言った義父の背中を見送ったのが、最後の姿でした。義父の絵を見ていると、亡くなってもなお今だに義父の匂いがしてくるようです」と話してくださいました。

敏子さんの息子で信の孫にあたる伸一さんは、「絵の具を混ぜるパレットナイフに見入る私に『伸ちゃんよぉ…』と話し掛ける祖父の茨城弁が今でも耳に残っている」と教えてくれました。

### 郷里の縁は続いていく

後日、取材の中で教えていただいた西山家の墓地を訪れると、その墓誌には信の名前が記されていました。それだけでなく妻・やへと、かつて大戸尋常小学校の校長であったやへの父、信ややへと縁があったであろう、数名の名も共に刻まれていました。どのような経緯があるのか、今となっては正確に知る人もいませんが、郷里と信の強い縁があったことを確かに物語っているかのようでした。

日本画壇で活躍した茨城町出身の洋画家・栗原信。その画歴こそ多くの資料で知ることは容易ですが、没後六〇年近く経った今、その人物像や町との関係性を物語るものはほとんど残されていません。信と茨城町の関係を物語る「町の絵」を見つけることは叶いませんでしたが、わずかに残る記憶の糸を集めた先には、絵を介して人々の記憶に残る栗原信賢という人間そのものが見えたような気がしました。

一人の洋画家と郷里の縁は、これからも在り続けます。それらを物語るものを一つの形とし、普遍的な文化として次世代に継承し育むことが、これからのまちづくりに大切なことではないでしょうか。

**少年期の環境が一生その人の画材や構想の周囲を取り巻いていることは画家の、無意識な隷属を意味していることにもなろうか**

――二紀会発行『栗原信 画集』より

8ページで紹介した、信が描いた屏風絵。恩師と教え子の親しい縁を感じさせる。涉さんが短歌を詠み、信は何を思い絵筆を走らせたのか。
右下には、昭和24年1月との記載がある。「俺の生まれる1年前だ。もしかしたら結婚や何かのお祝いの時に描いたのかもしれないな」と日出海さんは話します。

# まちで暮らす人 まちを想う人

── Feeling × Thinking

## 世界とつながる

まちで暮らす人

ミニチュアペインター／語学講師　Joshua Van Zaane

写真／通訳＝竹内慎　文＝ホシカワリエコ

ヴァンザアネ・ジョシュアさんはオーストラリアのゴールドコースト出身で、一九七四年生まれの四七歳。二〇代の頃、イギリスの大手ゲーム制作会社「ゲームズワークショップ」に在籍し、スタジオの画家としてミニチュアペインティングに取り組み、技術を身につけました。その後、妻となる千春さんと出会い、結婚を機に日本での生活を開始。現在は英会話講師を務めながら、長年磨いたミニチュアペイントのスキルを活かした活動を行っています。

### ミニチュアペインティングとの出会い

幼少期に住んでいた家は大きく、広い庭がありました。敷地が七エーカー(*1)ほどあったので、庭でバイクに乗ることができたんです。近隣の家も庭にプールがあるなど、敷地の広い家が多い地域でした。恵まれた環境で外遊びをする一方、家の中で静かに本を読んだり、レゴブロックで遊んだり。穏やかでマイペースな子どもでした。

学生時代には絵画を学びました。きっかけは、母が絵を描いていたからだと思います。オランダ人の母の親族に「真珠の耳飾りの少女」という絵を描いたヨハネス・フェルメールがいます。母の家系は血を継いでなのか画家やデザイナーが多く、私も自然な流れで美術系の進路を選びました。

学生の頃に〝ミニチュアペインティング〟と出会いました。最初は日本のプラモデルブランドTAMIYAのミニチュア戦車をペイントしたんです。それから興味が湧いて夢中になって。その後社会人になり、イギリスのゲームズワークショップに採用され、ペインティングスタジオの画家になりました。「ウォーハンマー」という世界的人気ゲームのキャラクターのペイントを担当することになったんです。ウォーハンマーは〝テーブルトークミニチュアゲーム〟と呼ばれているのですが、ボードゲームのようなもので、ダイスを転がして陣地を取り合う戦いのゲーム。私はこのゲームが大好きでした。

### 偶然の出会いから国際結婚へ

イギリスで働いたのちオーストラリアに戻り、ペイントの仕事を続けながら、家業である外構施工関連の仕事を手伝いました。その当時、オーストラリアとは全く違う日本の文化に興味が湧き、何度か来日していたのですが、二〇二二年、東京のカフェでたまたま隣の席に座ったのが、今の妻との出会いです。オーストラリアから来たと話をすると「私、行くんですよ!」と。

私の住んでいたゴールドコーストは、沖縄やハワイのようなリゾート地・観光地で、ビーチがたくさんありサーフィンが盛んです。当時妻はゴールドコーストでサーフィンをする予定があったんです。その後、SNSを通じて親交を深め、何度かお互いの国を行き来して、結婚することになりました。妻の仕事の都合もあり、結婚を機に私が日本へ。妻の実家がある水戸で暮らし始め、小美玉市の中学校でのALT(*2)を経て、現在土浦市の語学学校で英会話を教えています。

英語を教える仕事と共にペイントの仕事も続けています。日本に来てからですが、スペインで開催されたミニチュアペインティングの世界大会に出場し、トロフィーをもらったんです。そして現在、ペイントの技術をさらに高めるために、オーストラリアの大学で3Dアニメーションを学んでいるところです。このほか、ティーンエイジャーの頃に出会い、仕事でも関わったウォーハンマーの同人誌「ヒーローハンマー」を二カ月に一度のペースで発行。九〇年代の懐かしいゲームを愛する世界中の仲間たちと一緒に、約一〇〇

＊1：1エーカー＝約4047平方メートル
＊2：アシスタントランゲージティーチャー（外国語指導助手）

ページほどの冊子を作成し、SNSで情報発信するほか、日本のサムライが出てくる新しいゲームの開発にも携わっています。

## 茨城町での暮らしとこれから

二〇一六年から町での暮らしを始めました。病院やスーパーが近くにあるところはないかと不動産屋さんに相談したところ、大戸地区を紹介されたんです。この辺りは県庁所在地である水戸市から近いのですが、静かな環境です。妻の実家からも三〇分ほどで海も近く、私たちにとってちょうどよい場所かなと思いました。大戸地区は昔から住んでいる人たちの区域と、新しく分譲されている区域があり、様々な年代の人たちが暮らしているのですが、私たちが住んでいるところは昔から住んでいる人たちの区域のほう。近所のおばあちゃんが野菜を分けてくれることがあるのですが、言葉が通じなくてもお互いに声を掛け合うコミュニケーションを大事にしているんです。また、近くにある桜の郷地区では、最近は若い人が家を建てているようなので、これからさらに活気が出て町が発展していくといいですね。

休日は自宅でよくバーベキューをしています。オーストラリアではバーベキューの文化があるんです。実家に帰ると、みんなでバーベキューにビール！がいつものスタイル。でもしばらく帰ることができないので、週に一度、オンラインで両親とビールを飲みながら話をしています。妻は「家族の仲がよくて、親をとても大切にしている。同じように私の親のことも大切にしてくれている」と言ってくれます。バーベキュー以外は、自宅でいろいろな国の人とオンラインでボードゲームをしていることが多く、妻には「オタク」と言われていますが…（笑）。ありがたいことにペイントを教えてほしいと世界中の方から声を掛けられます。今はオンラインを活用しいつでも誰にでも教えることが可能な時代になりました。これからはペイントの文化をこの茨城町から発信し、発展させていけたらと考えています。

# 踏み入り顕わす

まちを想う人

ディレクター／映画監督　篠原利恵

写真＝アラタケンジ　文＝二川ナオミ

篠原さんは一九八七年茨城町小鶴地区生まれ。早稲田大学第一文学部仏文科卒業後、一橋大学大学院社会学研究科にて文化人類学を専攻。二〇一三年よりドキュメンタリー映像を多く手掛ける映像会社である株式会社テレビマンユニオンに参加。二〇一六年には「ドキュメンタリーWAVE／子どもたちのリアルを取り戻せ　韓国ネット依存治療最前線」でATP優秀新人賞を受賞。数々のドキュメンタリー制作を手掛けています。

## 退屈なまち

小学校、中学校と地元の学校を卒業しました。建設業を営む実家から五分くらいのところに祖父母の家があって、誕生日になれば親戚が一〇人以上集まるような地域の中で育ちました。祖父は役場勤めで祖母は学校教師。二人とも公私共に地域と深く関わっていたので、近所の皆さんから「篠原さんの孫」というように認識されていました。何不自由なく満たされた環境だったとは思いますが、どこか退屈で、小学校高学年の頃にはすでに「早く町を出たい！」と考えるようになっていました。高校時代は音楽と読書に夢中でした。放課後は水戸ライトハウスに通ってバンド活動、家に帰るとずっと小説を読みふけるような日々でした。そんな時、高校の先生に勧められて読んだ村上春樹に影響を受け、大学は早稲田大学に進学しました。

## ものの見方

大学時代は中南米音楽のサークルに所属し演奏活動をしたり、自分でも音楽をつくったりしていました。「ずっと音楽を続けたい」と考えているうちに就職活動もせずに卒業。そんな時に、恩師となる岡崎彰先生に出会いました。先生は「自分の音楽」について悩む私に「音楽はいつからあなたのものになったのですか？」と言い、「他者を知ることで初めて自分のことを考えられるものだよ」と教えてくださいました。そんな岡崎先生は文化人類学という学問をやっている人でした。この出会いを経て文化人類学に目覚めた私は一から勉強を始め、大学卒業から一年後、一橋大学大学院へ進学しました。

研究テーマは「大相撲」。当時メディアでは、大相撲の八百長問題が騒がれており、力士が皆悪人であるような報じられ方に違和感を感じていました。大相撲は神事としての側面、宮中行事としての側面、豊作を願う儀式としての側面、見せ物としての興業の側面など、数多くの側面を持ち、変化し続けている文化です。長い年月の間に構築された文化の中には数々の暗黙の了解があって、スポーツマンシップという現代的な物差しだけで相撲文化の良し悪しを語ることはできないということがわかってきました。研究では実際に相撲部屋へ半年ほど通いフィールドワークを行いました。そういった経験は、今の職業に通じるところがあるかもしれません。

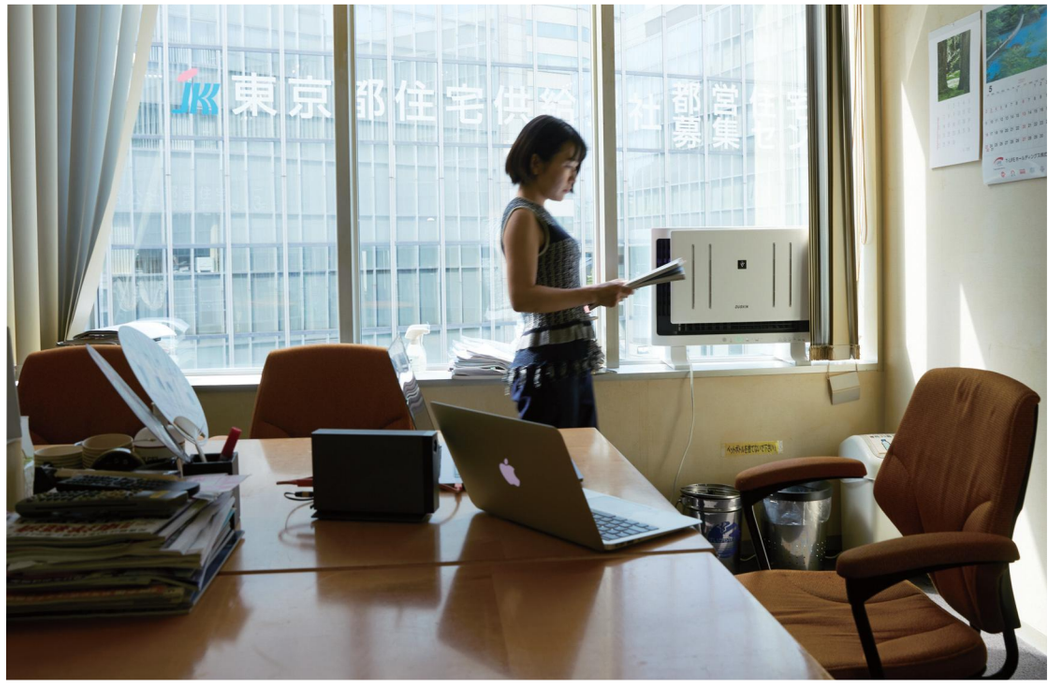
## ドキュメンタリーとの出会い

株式会社テレビマンユニオンに参加して今年で九年目を迎えます。仕事を始めて一年目、アシスタントディレクターとして動き回りながら、空いた時間で自分の撮りたい作品の企画を練っていました。ある日、会社の先輩との何気ない会話で、地元茨城にはロックンロールを踊る強面の集団がいるという話になり、それが実は一九七〇～八〇年代に竹の子族同様、若者文化を風靡した「ローラー族」の生き残りであることを知りました。先輩の勧めもあり、企画書を書き上げ、三年の取材を経てようやく一つの作品となりました。以降、作品を撮りながら常に企画を考える日々を送っています。

## カメラを通して見えた故郷への想い

最近では、映画『ゾッキ』（二〇二二）の舞台裏を描く映画「裏ゾッキ」（二〇二二）で監督・撮影・編集・を務めました。これまでたくさんのドキュメンタリー作品を手掛けてきましたが、「裏ゾッキ」では自分の中に新しいものの見方が生まれたような気がしています。「ゾッキ」は俳優の竹中直人さん、山田孝之さん、齊藤工さんの三人が監督を務める作品です。原作の作者である大橋裕之さんの地元、愛知県蒲郡（がまごおり）市では地元有志たちが長年映画撮影の誘致に取り組み、念願叶って三週間のロケが実施されました。映画と市の両方の裏側を追いかけ、五〇〇日を記録したのが「裏ゾッキ」です。映画づくりの裏側で奮闘する蒲郡の人々を追いかける中で、両親や祖父母が地域のために活動していた姿を思い出し、いつの間にか故郷のことを考えている自分がいました。

東京に住んでいるとどうしても自分のことばかりで精一杯になりがちですが、仕事を通して思いがけず、茨城町について考えるようになりました。今では退屈で当たり前だった風景がとても愛おしいと感じています。今すぐ自分に何かができるとは思わないですが、きっと今なら故郷を昔とは違った視点で捉えることができると思いますし、失われていくものをカメラ越しに残し、まちの魅力を伝えられるような気がしています。



映画「裏ゾッキ」公式サイト
ura.zokki.jp

## 茨城町のおみやげハーブティー
## 3つのフレーバーが決定!!!

サポーターからいただいた
感想をもとに味の調整を行い、
いば3オリジナルブレンドが決定しました!
今後は各ブレンド名、
パッケージのデザインを決め、
秋頃を目途に商品化予定です!
最新情報は「の」プロジェクトの
インスタアカウントをチェック!!!

いば3「の」プロジェクト
インスタアカウント
最新情報をチェック!

## From Sun –編集室から–

Sun 第13号をお届けします。

実は取材をするまで、庁舎の中に絵画が飾ってあっても、それを誰がいつ頃に描いた作品なのかを考えたことはありませんでした。同じ茨城町で育った方が残した作品が身近にあるなら, 作品だけでなく, その方が生きてきたことを憶えていきたいなと取材をとおして思いました。[ひで③]／根矢涼香さんに引き続き、映画界などで活躍する篠原利恵さんを裏ゾッキ公開のニュースから知りました。あまり身近に感じることが少ないジャンルですが、町内で育った方がそういった場で活躍している姿を見ると余計嬉しいですね。[MTBIG3]／スマホでいつでも写真を撮れることから、気づけば自分の思い出はすっかりそれ頼り。記録に残していない何気ない話や風景も、忘れないようにしなければなと思いました。[がっきー3]／今回の特集、栗原信の足跡を巡る中で、地区で暮らす人々の歴史も浮き彫りになりました。いずれどこかに纏めたいと思います。後日、信が町を描いた絵を見つけたとの情報が。信が描いた涸沼湖畔が載るその本には「私の生れ育った故郷を描いた小品で、遠い山は凡山凡水の中で唯一つ夢の対象であった、茜色の筑波山なのである」とあります。信が故郷を描いた絵は確かにありました。作品の現在の所在は不明ですが、実際にこの絵を見てみたいものです。[YANNA3]

紙面に載せきれなかった写真、取材のお話など、いば3オフィシャルWEBサイトにUPしています。
いば3ふるさとサポーターズクラブ オフィシャルWEBサイト　town.ibaraki.lg.jp/iba3

次号は、2022年3月発行予定です。

**Sun 第13号 夏号**　2021年7月30日発行

企画・発行：いば3ふるさとサポーターズクラブ事務局
[ 茨城町 町長公室 秘書広聴課 ]
〒311-3192 茨城県東茨城郡茨城町小堤1080
TEL：029-240-7148 MAIL：iba3@town.ibaraki.lg.jp

編集・アートディレクション・デザイン｜i,D
取材・出筆｜二川ナオミ ホシカワリエコ 石川聖太
写真｜竹内慎 アラタケンジ 絵｜やまなかももこ 石川聖太
通訳｜竹内慎 印刷・製本｜株式会社光和印刷
本誌内容の無断転記、記載、複写を禁じます。 ©Sun all rights reserved.

参考文献
・常陽藝文1999年9月号 藝文風土記 二紀会を創立した風景画家 栗原信 ・美術手帖1949年6月号 ペインティングナイフ ・栗原信画集 ・アトリエ1960年6月号 私の風景画 ・あゆみ 茨城町立大戸小学校創立100年誌 ・信州新町美術館 有島生馬記念館図録 ・芸術新潮1995年8月号 カンヴァスが証す画家たちの「戦争」

Special Thanks［順不同］
栗原敏子さん 栗原伸一さん 栗原英一さん 清水秀一さん 清水慎一さん
奥津日出海さん 打越範男さん 林洋市さん 茨城町立大戸小学校
株式会社テレビマンユニオン

### “いば3”ではサポーターを募集しています!!

“いば3ふるさとサポーターズクラブ”は
いばらきまちがつくるあたらしくて
ゆるやかなつながりの場。
設立から5年目を迎え、
会員数は900名を突破!
ますます盛り上がる“いば3”と
みんなでつながろう!!!

お申し込みはこちらから
town.ibaraki.lg.jp/iba3

いば3 WEBサイト

連載
# マチのケシキ

**第13回 風景と景色の大切さ**

絵｜やまなかももこ 文｜石川聖太

絵：やまなかももこ
画家。絵本作家。女子美術大学卒。
絵本や挿絵を中心に創作活動を行っている。
主な作品に「田んぼのいのち」（くもん出版）、
「俵万智3・11短歌集 あれから」（今人舎）など。
momokomo.net

とうもろこしの森を抜ける子どもたちの
元気な表情がそこにありました。

先日、町内である映像作品の撮影があり、ひょんなことから撮影現場に立ち合う機会がありました。ロケ地は、幼い頃から知っている場所。晴れの日、雨の日や風の日、良いことがあった日や悲しいことがあった日、そして大人になった今でも、変わらずにあり続ける場所です。

スタッフが慌ただしく撮影準備をしている間に、カメラチェック用のモニターを覗かせてもらいました。映し出される風景は、変わらずそこにあるものではなく、一作品の景色となって映っています。

たかが風景、されど景色。

古くは「気色」と表記されていたことからもわかるように、その時の心情によって、景色は高揚、落胆、安堵などを映し出す鏡のようなものになります。風景はただそこにあるだけなのに、見る側が勝手に様々な景色を想像しているともいえます。

と、この文章をそこまで書き進め、気分転換を兼ね近所へ散歩に出ました。雑木林を抜けると、梅雨の晴れ間の青空の下、小さな丘に青々と伸びる大きなトウモロコシ畑が目の前に広がります。探検でもしていたのか、トウモロコシを掻き分けて子どもたちが飛び出してきました。

その様子を横目で見ながら、あの子どもたちにも、町の様々な風景が、それぞれの持つ景色として心に残っていくのだろうなと感じました。

風景と景色を意識することは、私たちの心を豊かにしてくれるきっかけであると思います。

Sun 第十三号 二〇二二年七月三〇日発行 企画・発行 いばらふるさとサポーターズクラブ事務局 ibra3@town.ibaraki.lg.jp TEL 029-240-7148